

発表 1

Presentation 1

「場所の力」の理解へむけて 方法論的整理の試み

大城 直樹*

神戸大学

Towards an Understanding of ‘the *Intensité* of Place’: A Methodological Argument

Naoki OSHIRO*

Kobe University

In this article, I discuss the origin and development in geography of the concept of place, and I offer a critical review of ways to conceptualize and estimate the intensité of places. The concept of place appeared in humanistic geography during the late 1960s and 1970s in an effort to qualify the existential-experiential world, focusing especially on human agency, and it was stimulated by writings in phenomenological sociology and studies of the “perception of city” in architecture. The concept of place challenged geography’s predominant paradigm which ignored human agency, and which pursued a rather reductionist and quantitative approach. This desire to describe the actual life-world resonated with themes of modern alienation, and nostalgia for home--themes which had lost prominence during the post war period of economic growth, while retrogressive and essentialistic approaches gained favor. In a globalizing modern world, however, we cannot ignore the reality of hybridity and heterogeneity. To understand the concept of place today requires attention to such realities, and a consideration of the constitutive aspects of place which produce and re-produce geographical constellations, including power relations involving differences in gender, age, race, sexuality, and how these terms are constructed. For these reasons I prefer the idea of *intensité*, rather than power or force. An adequate assessment of the *intensité* of place requires a consideration of the interplay and relative strength of internal and external factor, and in this pursuit, geographers can contribute their specific expertise both within and beyond academia.

私の発表はこれから続く5つの発表とは性質が根本的に違っています。というのもシンポジウムのオーガナイザーの注文では、私の発表は事例報告ではなくて、方法論的・

*E-mail address: oshiro@lit.kobe-u.ac.jp

理論的な概念整理をしてくれということであったからです．そのため主旨としては問題提起的なものになりますが，他の発表との接点を探ることは後ほどの全体討論で行われることと思います．また，この発表が抽象的なものになるだろうということを含めお断りしておきます．報告の順番は，まず最初に「場所」という概念が，地理学，特に人文地理学の中でどのようにして現れてきたのかということ述べ，次にそれに対する批判を整理し，最後にシンポジウムのタイトルにある「場所の力」というものをどういうふうに考えたらいいのか，そのためのアプローチの糸口についてお話ししたいと思います．

1．地理学における「場所」概念の分節化

まず最初に「場所place」概念が，地理学の中でどう分節化してきたか，その導入的な説明を行いたいと思います．「場所place」という概念はアングロ=サクソン圏の地理学のなかから出てきました．場所という言葉を経験として用いたのは人文主義地理学者humanist geographersだと言うことができます．日本語にも数多く翻訳されているイーファー・トゥアンYi-Fu Tuanをその代表者として，他にエドワード・レルフEdward Relph．この二人は元々，自然地理学ないしは地質学の専攻で，後に人文主義というかヒューマニスティックなアプローチに携わっていきます．彼等とはまた違ったスタンス，つまり地理学のディシプリンとしてのスタンスを意識しつつ地理思想史の立場から研究を進めるアン・バッチマーAnne Buttmerや，その後に出てきた，幾分素朴なヒューマニストであるポーコックD. PocockやポータウスJ. D. Porteousといった人達もいます．ヒューマニストとはいえ決してひとくくりには出来ない実情があることを憶えておく必要があるかと思えます．そしてこの潮流は，時代的にいえば1960年の後半位から顕在化してきた動きとすることができるでしょう¹⁾．

人文主義地理学者の主張というものは要するに，地理学にヒューマニティというものを回復しようというものです．計量革命以降，特に顕在化してきた人間不在の地理学，たとえば空間還元主義に代表されるようなアプローチのヘゲモニーに対する異義申し立てを行うものであったとすることができます．

では，何故彼等・彼女たちは地域とか空間といったそれまで用いられた用語ではなくて，わざわざ場所placeという語を概念として使ったのでしょうか．これについてはよく知られているように，ヒューマニスト達の主張というものが，人間存在の実存的側面を研究対象にすること，そして，人間が生活空間の中で主体的に生きている現象的な感覚世界，それを理解することが必要なのだというものであったからです．

そういうわけで術語というよりは一般名詞的に用いられて来たこの場所という言葉を経験的な日常生活の世界を捉える概念として用いることになってきたわけです²⁾．

同じ時期に，アメリカ合衆国では社会学や心理学でもヒューマニスティックなスタンスを強調する動きがありました．ですから，これが地理学でのみおこった運動ではなく，広く人文・社会科学の傾向に即したものであったということに留意しておきたいと思えます．たとえば社会学のピーター・バーガーPeter Berger．彼は現象学的社会学を提唱したシュッツA. Schutzの弟子にあたります．場所という概念をバーガーが用いたわけではありませんが，着想上の影響を人文主義地理学者たちの言説に見て取ることができます．1967年刊の*The social construction of reality : a treatise in the sociology of knowledge* (邦題『日常生活の構成：アイデンティティと社会の弁証法』)は現象学的社会学の教科書的著作であり，また1973年刊の*The Homeless Mind: Modernization and Consciousness*

(邦題『故郷喪失者たち』)と、1976年刊のエドワード・レルフの著作*Place and Placelessness* (邦題『場所の現象学』)のタイトルは符丁していると考えられます。内容的にも現代における人間の疎外的状況を主題としている点で、影響関係があることは明瞭です。また、1970年代前半という出版年次を見ても、両者が日本で言うところの高度経済成長後の社会変容の理解という問題意識に立っていることも解ります。こうした社会科学での動きのほかに同様の傾向を持つものとしては、建築学、建築史において行われた、都市空間を構成する様々な部位とその組み合わせのもつ質を問い直す研究があります。時代的に少し前になりますが、1960年に出版された*The image of the city* (邦題『都市のイメージ』)において、人々がどのように都市という空間を知覚しているのかを扱ったケビン・リンチKevin Lynchはとくに著名ですし、生活空間の知覚という問題系を建築学以外の分野へ広めていくきっかけを作りました。その他に、*Learning from Las Vegas* (1972年) (邦題『ラスベガス』)で知られるロバート・ベンチュリRobert Venturiらによる、非=オーセンティックな場所の研究も、こうした研究に刺激を与えたことは間違いのないでしょう。

こうした流れは、1980年代に入って建築史の中でポストモダニズムが主張されてきますが、その代表的な論客であるケネス・フランプトンの地域主義の主張にもつながっていきます³⁾。こうした人達に一貫するのはバナキュラーなものへの関心です。バナキュラーなものというのはその土地の持っている固有性、その土地固有性といったようなものになるかと思うのですが、それを建築家ないしは建築史家がクローズ・アップしてきたということは非常に意義を持っていることだと思えます。そうした彼等の思考は地理学者J.B.ジャクソンJacksonと通底していると考えられます。人文主義地理学者と厳密にいえるかどうかかわからないのですが、1951年に創刊された雑誌*Landscape*の主宰者であるジャクソンは、ハーバード大学やカリフォルニア大学パークレー校で非常勤講師として長年教鞭をとっており、地理学のみならず、建築学や美術史など、アカデミアとその周縁域においてかなりの影響力を持っていた人物であり、彼が地理学者のヒューマニストに影響を与えなかったと想像することの方が難しいと思われ⁴⁾。後で出てきますが、一貫してバナキュラーなもの、その土地固有性といったものを彼は一貫して評価してきましたが、重要なのは彼が、それをエッセンシャルなもの、本質的なものというふうに見ないスタンスをとっていたということです。このことがヒューマニスト達と彼の間に一線を画す理由となります。彼の近著では、集落景観に表象される定住性よりも、むしろ移動性ということに関心の重心がおかれているようです⁵⁾。以上、場所をめぐる非常にラフな整理がこのようなかたちで可能かと思えます。

2. 「場所」概念に対する批判と練り上げ

次に、ヒューマニスト達の主張が無批判に受容されていったのかどうかということになるのですが、決してそうではなかったということができると思えます。確かに私たち人間の生活は主体的に行われているわけですが、その能動的な行為と、社会的規範とか制約、もっと言えば構造から切り離されて存立しているわけではありません。デレク・グレゴリーDerek Gregoryはデヴィッド・レイDavid Leyとマーヴィン・サムユエルズMarwyn Samuelsが編集した画期的な論集、これが人文主義地理学のマニフェストとなる、文字通り*Humanistic Geography: Prospects and Problems*という題の本の書評論文の中で、主体と構造、エージェンシーとしての主体と、主体をある種の拘束というか規定

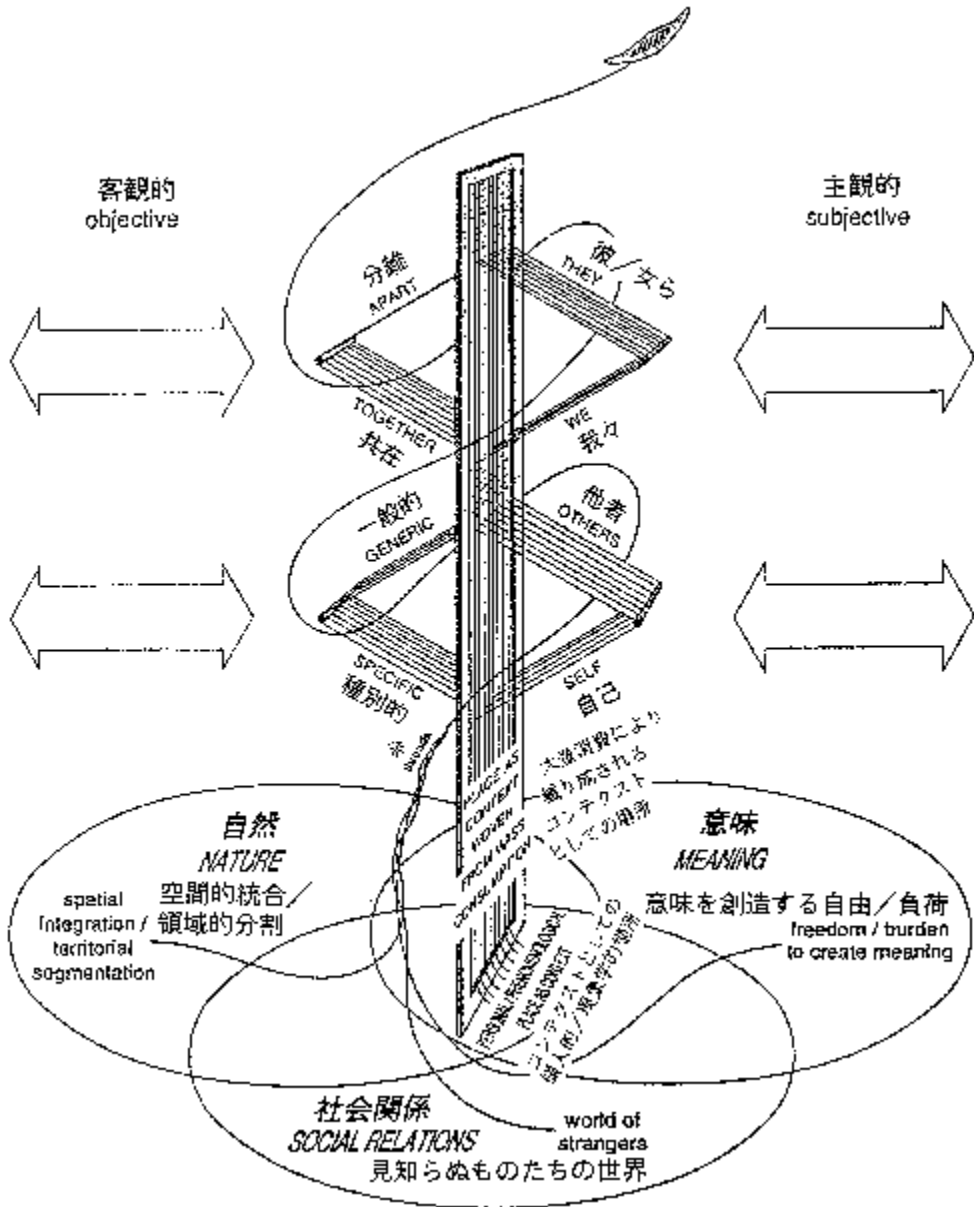


図1 消費の織機と知的表層

(R. Sack 1988 : 注9 参照 , The Association of American Geographersのご好意により翻訳転載)

していく、主体の行為を拘束していく構造との相互作用というか相互貫入性とか、相互介在性というものをマテリアルに解釈しなければ社会の中で生きる我々の活動の現実を捉えることなどできないのだと主張しました⁹⁾。

そうすると、場所という概念も素朴に人間の主体的行為の舞台と解釈するだけではすまなくなってきます。1980年代の後半から主としてイギリスにおいて社会理論やポリティカル・エコノミーの議論を貪欲に取り始める動きが出てきます。その議論の中で場所と

いうものは、様々の諸力の競合するアリーナ、舞台や競技場として捉えられるようになってきます⁷⁾。

同時に北米においては、場所の概念を認識論的に検討する動きも出てきます。これはロバート・ザックRobert Sackや、アグニュー & ダンカンJ. Agnew & J. Duncanの編集した本、あるいはニコラス・エントリキンJ.N. Entrikinの著作の中で示されています⁸⁾。

図1、ザックの図をご覧ください⁹⁾。ザックの論文は現代における消費の場所というものを示す極めて概念的なものです。簡単に説明しますと、まず場所のコンテキストを生起せしめる3つの領野（意味、自然、社会）があります。意味の領野とは、意味を作り出す自由さと作ることによって生じる負荷の領域です。それと、社会関係、ストレンジャー（見知らぬもの）の世界という領野。そして、自然ないしは空間的な統合という領野。この場合の自然は、いわゆるnatureだけでなく所与givenの人工的な領域も相当すると考えてもいいと思います。

これらの領野が重なり合うところに、個々の現象学的な場所のコンテキストがあると彼は考えるわけです。この図は織機のイメージによって描かれていますが、三つそれぞれの領野から糸が引き出されてきて、それぞれの要素が、織機の両サイド、すなわち片方のサイドが主観的なモーメント、もう片方は客観的なモーメントにあたりますが、それぞれの影響を受けて左右へ引っ張られ、そしてそれぞれの糸が一本により合わさって、横糸として、他者とか自己、あるいは一般的と特殊なもの、それから彼/女らと我々、離れているものと一緒にあるものといった、縦糸の合間を縫っていき、結果的に織り上げられていくのです。これについては後で消費に限らず地域や場所といったものをどう理解するかというところでお話します。

このほかにそれ以降、実はイギリス、アングロ圏で盛んなのですが、その流れの延長でジェンダーとか人種とか年齢階層とかいった様々な差異、参照対象の本質化や、あるいはその境界を実定化していく動き、またそれをめぐる争いの場に関する研究が盛んに行われてきました。こうした研究のスタンスは、やはり1980年代以降、活気を呈しているカルチュラル・スタディーズの影響をすごく強く受けているものと考えられます。そうしたスタンスからの批判は、ともすれば静態的に、あるいはノスタルジックで安定的に場所を捉えようとするヒューマニスト達——安定的というのは場所に普遍性とか歴史性、伝統性、そういったものを求めるということなのですが——に対して、それらが本質主義的な傾向を持っている可能性があること、そうした場所の理解というものがその場所に現実にあるはずの差異、さっき言ったジェンダーや階級、人種、そういったものを隠蔽してしまう可能性があるということを鋭く指摘するものです¹⁰⁾。先ほどから出てきている本質主義とは、なんらかの対象あるいは後に記号化されるものが対象化される時点で、それを認識するものとその対象とのあいだの差異があくまでも偶有的に意識化され固定化され、過度の価値づけが行われるようになるプロセスを棚上げすることで、むしろその差異性を、昔からというか元々備わっているもの、ないしは所与のもののみなし、それがその対象の本質をなすものと認識することです。すなわち所与の差異というものが、なんらかの対象、例えば女性であるとか非=白人とか、セクシュアリティ—といったものの本質をなすというふうに考えること、それが本質主義なのです。

そうした批判から浮かび上がってくるのは、本質主義に陥りやすい、ルーツといった観念を周到に避け、むしろ場所というものが持っているトラベリングtravelingな質を評価する態度だだと思います¹¹⁾。例えば、周知のように、都市という場所には、通勤や観光、

または転入や不法侵入というかたちで、多くの人々が集まってきましたが、その人達は元々は村落や別の都市からやってきたわけです。都市にせよ村落にせよ、本来、移動が全くないというわけではない。いろんな所からいろんな人が集まっているんな要素を互いに出し合うことによって、それがその都度様々な形で融合したり対立を起こしたりするわけですね。村であっても都会に行った人がまた帰郷したり、都市からの移住者がやってきたり、あるいは様々なメディアからの情報によって、それまでとは全く違った何ものが村にもたらされるということは現実にあるわけです。その外にグローバル化の問題とか、あるいはナショナルなレベルでの情報の、メディアを通しての一元化、そういったものも勿論あるわけです。

このように見てみますと、現代の場所、あるいはロカリティーが持っている異種混濁性、それから——これもカルチュラル・スタディーズの用語なのですが——雑種性、ハイブリディティーですね、場所というものを考える際には、そういう現実的要素と向かい合わざるをえなくなるのではないのでしょうか。以上のように場所という概念が地理学の中に登場し、そして批判が行われてきたということをおさえた上で、その先、「場所の力」というものをどう捉えたらいいかということに移っていきたいと思います。

3. 「場所」と「力」

場所の力という言葉から、「力」というものをどう考えたらいいのかということですね。そのために、ここでは二つの「力」に関する概念をとりあげてみたいと思います。一つはその場所に本来的に備わっている何らかの力、といったようなものです。それを古代ギリシャではアニマ・テラーエとか、ゲニウス・ロキと言ったり、東洋では「風水」と呼んできたのだと思います¹²⁾。アニマ・テラーエは土地の霊、あるいは地霊、それからゲニウス・ロキは土地の質というよりも土地の気配といったものになります。ですからこの両者は少しニュアンスを異にしているわけです。

それに対して風水の方は、この両方の意味を持ち合わせていると考えることができます。問題なのはこうしたものが確かに土地の力として語られているとはいえ、そこがよい場所であるとか、よい気配を持った集落であるといったことが、人間がそこに介在することによって初めて顕在化してくるものだという事です。人間がいなくてもその土地がいいとか悪いといったことはあるかもしれませんが、しかしそれは、人間中心な見方をすれば、あくまでも潜在的なものであって、その顕在化は、人間が介在することによってしか可能とならない。我々はこのところを了解しなければならぬのだと思います。特に風水に関しては、最近、周知のごとく血液判断やト占のような扱いでものすごく流行していますが、われわれ地理学者は、そうした見方、オカルトとかト占とは違った見方から、そこで生きている人々の土地に対する評価の質そのものを問題にしていくべきだと考えます。ですから土地そのものの属性というよりも、人間と土地の間の介在的なプロセス、そしてその表象のかたちを考えるべきだと思います。このように述べると、こうした話がヴィダルやサウアー的な人文地理学の伝統的な着想のなかにすでにあったことを思い出しますが、しかしながら今日では、そうした場所の持つ力というものを、自律的とか自生的なものとして評価するだけではやはり十分なものとは言えないと思います。我々が生きる場所というものは、先ほどのザックの図にもありましたが、さまざまな介在的なプロセスにより構成されているからです。ここで場所の力に対するもう一つの問題を提示しておきたいと思います。

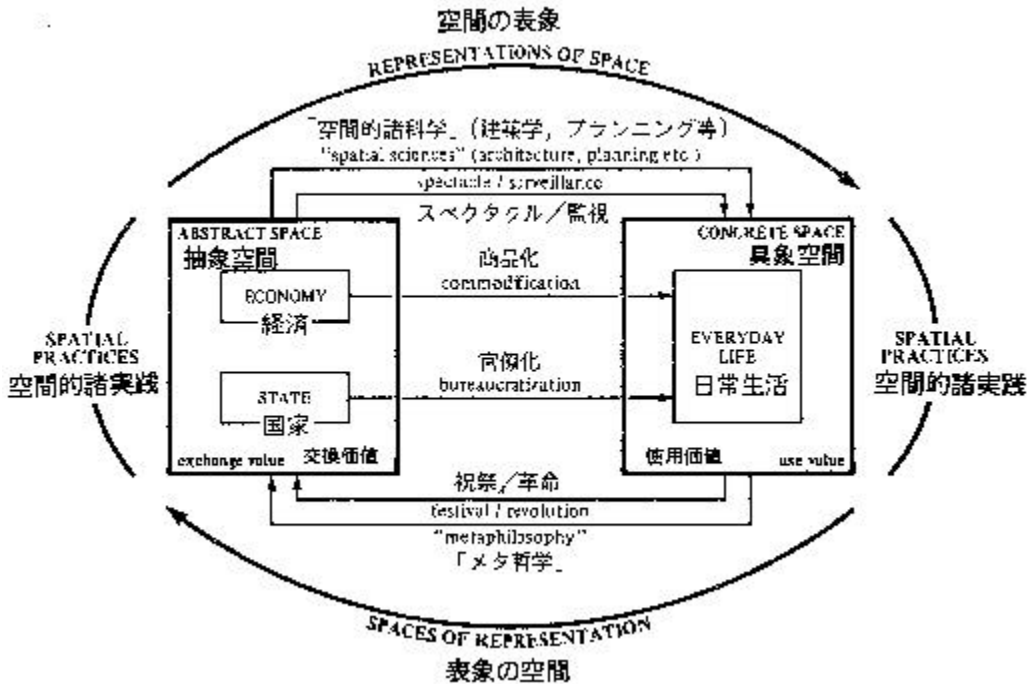


図2 権力の目

(D. Gregory 1994: 注13参照, Blackwell出版社のご好意により翻訳転載)

「力」というとパワーないしは権力とイメージされることが多いかと思います。ここで図2をご参照下さい。これはデレク・グレゴリーの*Geographical Imaginations*という本に出てくるものです¹³⁾。グレゴリーのアイデアというよりはアンリ・ルフェーブル Henri Lefebvreのアイデアをグレゴリー一流の手付きで図式化したものです。簡単に説明しますと、まず我々が生活している日常生活の舞台、これを「場所」と言い換えてもいいと思うのですが、その「使用価値」に充たされた空間、具象的ないしは具体的な空間があります。いろいろな「力」がそこには介在していますが、抽象的な空間、また「交換価値」で充たされた空間から派生してくるものとして、ここでは「経済」と「国家」という二つの審級がとりあげられ、それらが具象的空間にベクトルを向けていると措定されています。「経済」では「商品化」の力が具体的な空間に働きかけるし、「国家」では「官僚化」、要するに管理の力が働いてきます。こうしたものはスペクタクルなもの、すなわち大規模な土地開発や目を見張るような建造物の新設といったものに限らず、たとえばG8サミットといった大掛かりなイベントをもその意味に含んでいます。それから監視ですね。また、空間的諸科学を通しての働きかけもあります。この場合、空間的諸科学は、建築学やプランニング(都市計画)とかいったものを通して、具体的な使用価値に充たされた我々の日常生活を囲い込んでいくというような役回りをします。こうした作用の全体をルフェーブルは「空間の表象」と言っています。ここまでの話であれば、近代社会に関するの巷間に溢れる言説の類、我々の身体、すなわち具体的なものが制度や国家によって囲い込まれるといった類の話に終わるのですが、それに対して別の、

あるいは逆のベクトルは存在しないのか、働きかけはないのだろうか、いやあるだろう、ルフェーブルはこちらの方を「表象の空間」というわけです。それには祝祭とか革命といったものがあるわけですが、それによって、国家、経済的なものによって代表される「抽象的な空間」というものを転覆、あるいはずらすといったようなことが行われる。それから、空間的科学に対比されるものとしてメタ=哲学が対置されますが、これは空間科学的な思想とは違った考え方、それをずらすような思考によって働きかけることができるのではないかと、そのことをこの図は示唆しているわけです。

ですから、パワーとしての力であれば、通常、「空間の表象」において、抽象空間から具象空間へと働きかける方向性を考えるわけですが、それに加えてそれと反対の方向、「表象の空間」の方からの働きかけというものも、場所の「力」というものを考える上で考えていかなければならないのではないかと、そう思うわけです。

最後に、もう一度図1に戻って、本質主義的な場所の理解というものを越えていくにはどうしたらいいかということについて考えてみたいと思います。場所を実定化していくこと、固定化した見方で捉えることをいかにして相対化していくかということですが、それは、要するに所与のものgivenとして考えられているものをいかにずらしてイメージしていくか、その構築的プロセスをいかにイメージしていくかということに繋がる問題だと思います。この図を消費世界に限定せずに——勿論、消費というモーメントは我々の生活の中で大きなウェイトを有しているわけですが——もう少し広げて見たいと思います。まず自然nature的領野ですが、これを地域とか場所、空間的な枠組みとして考えてみたい。自然のものは確かに所与のもので、人間の手で作り出されたものではないわけですが、それ以外にわれわれが生活するうえで所与の領域性を有するもの——例えば地域とか圏といったもの——を、第二の自然として考えることは出来ないでしょうか。市、区、ある特定の地域、そういったものは全部物象化された社会的産物なわけです。それをあまりにも固定化し、所与のものと考えてしまえば、潜在的な可能性をどこかに棚上げしてしまうことになるのではないかとことすね。しかも、そういった空間的な枠組みというものは、我々が生きている具体的な空間の中で、実は幾重にも重層している。さらに整合的に重層しているだけでなく、インボリューションなど様々な作用によって、あるいは矛盾的に、あるいは不整合に重なっているであろうことも考えなければいけない点だと思います。そして、社会関係、これは他者との交渉、折衝negotiation、それから他者による意味の付与、他者のまなざし、あるいは先ほど少し出てきたように交通、移動、traveling、そういったものの質も念頭におきたい。そして、最後に意味、これを文化と捉えると、宗教、世界観、あるいは民俗と呼ばれているような慣習的な実践、そういったもの、そしてそれらが生み出す差異。この差異は勿論社会関係のなかで、他者からのまなざしによって顕在化してくるものです。こうしたものが重なり合う。そして重なり合うことによっていろんな力が出てくるわけですが、その時にいろんなモーメントが交錯することによって立ち現れてくる、その機制に留意した上で、その土地固有の力を評価していかなければならないのではないかと考えます。その場合、「力」というものを、パワー、あるいはフォース、そういった言葉ではなく、あえてフランス語のニュアンスを取り入れて*intensité*（強さ・濃さ）と捉えて見ることができないものかと考えています。

以上、問題提起として「場所の力」ををどういうふうに捉えたらいいのか、それを私なりに考え報告させていただきました。

注

1. 人文主義地理学の文献として本文中で言及した地理学者の代表的なものを挙げておく（邦訳のあるもののみ）。イーラー・トゥアン（山本浩訳）（1988）：『空間の経験：身体から都市へ』筑摩書房（原著は*Space and Place*, 1977, University of Minnesota Press）, 同（小野有五・阿部一訳）（1992）：『トポフィリア：人間と環境』せりか書房（*Topophilia: A Study of Environmental Perception, Attitudes, and Values*, 1974, Prentice-Hall）, エドワード・レルフ（高野岳彦他訳）（1991）：『場所の現象学』筑摩書房（*Place and Placelessness*, 1976, Pion）, 同（高野岳彦他訳）『都市景観の20世紀』筑摩書房（*The Modern Urban Landscape*, 1987, Croom Helm）, （1999）：アン・パッティマー（井上朋子訳）（1981）：「生活世界のダイナミズムの把握」（千田稔訳編『地図のかなたに』地人書房, 1981年所収。原著は*Grasping the dynamism of lifeworld*, *Ann. Ass. Am. Geogr.* 66-2, 1976, 277-292）。ポーコックとポーティウスの論文は, 米田巖・瀧山健一訳編（1992）：『心のなかの景観』に収められている。なお, 人文主義地理学に関する書誌情報源として山野正彦（1987）：「人文主義地理学関係文献目録」人文研究（大阪市立大学文学部）39, 211-237を参照されたい。
2. たとえば英語におけるtake placeやout of place, fall into placeなどといったような用例を想起すれば理解できるものと思われる。
3. K.フランプトン（室井尚・吉岡洋訳）（1987）：「批判的地域主義に向けて」, H.フォスター編『反美学：ポストモダンの諸相』勁草書房所収（原著はHal Foster ed. *The Anti-Aesthetic*, Bay Press, 1983年）。
4. P. Groth（1997）*Frameworks for Cultural Landscape Study*, in P. Groth & T.W. Bressi eds., *Understanding Ordinary Landscapes*, Yale University Press, pp. 1-21.
5. John Brinckerhoff Jackson（1994）：*A Sense of Place, A Sense of Time*, Yale University Press.
6. D. Gregory（1981）：*Human agency and human geography*, *Trans. Inst. Br. Geogr.* N.S.6, pp. 1-18 , D. Ley and M. S. Samuels (eds.)（1978）：*Humanistic Geography: Prospects and Problems*, Maaroufa Press.
7. イギリスにおけるこの種の著書や論文は枚挙に暇がないほどである。参考までに“Place”という語をタイトルにもつものを挙げておく。K. Anderson and F. Gale (eds.)（1992）：*Inventing places*, Wiley, G. Kearns and C. Philo (eds.)（1993）：*Selling places*, Pergamon Press, M. Keith and S. Pile (eds.)（1993）：*Place and the politics of Identity*, Routledge, J. Duncan and D. Ley (eds.)：*Place/culture/ representation*, Routledge, D. Massey（1994）：*Space, place, and gender*, Minnesota University Press, T. Skelton and G. Valentine (eds.)（1998）：*Cool places: geographies of youth cultures*, Routledge, D. Miller et al.（1998）：*Shopping, place and identity*, Routledge, H. Nast and S. Pile (eds.)（1998）：*Places through the body*, Routledge.
8. R.D. Sack（1992）：*Place, modernity, and the consumer's world : a relational framework for geographical analysis*, Johns Hopkins University Press, J. Agnew & J. S. Duncan (eds.)（1989）：*The Power of place : bringing together geographical and sociological imaginations*, Unwin Hyman, J.N. Entrikin（1991）：*The Betweenness of Place*, Macmillan.
9. R.D. Sack（1988）：*The consumer's world: place as context*, *Ann.Ass.Am.Geogr.*78, pp. 642-664.
10. D. Massey & S. Hall (eds.)（1995）：*A Place in the world?: places, cultures and globalization*, The Open University, 参照。
11. たとえば, J. Clifford（1997）：*Routs: Travel and translation in the late twentieth century*, Harvard University Press, 加藤政洋・神田孝治（1999）：「旅と周縁の空間」現代思想27-13, pp.127-141

など。

12. たとえば, C. Norberg-Schultz (1979): *Genius Loci: towards a phenomenology of architecture*, Rizzoli, 鈴木博之 (1990): 『東京の地霊』文芸春秋, 村山智順 (1931): 『朝鮮の風水』朝鮮総督府, 渡邊欣雄 (1990): 『東アジアと風水思想』人文書院など参照。
13. D. Gregory (1994): *Geographical Imaginations*, Blackwell.